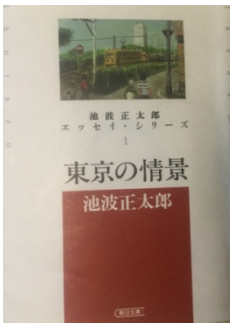
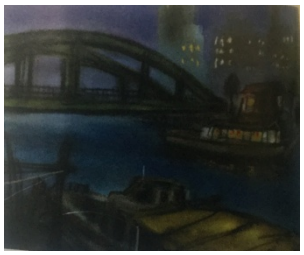
池波正太郎『東京の情景』



写真は池波正太郎エッセイ・シリーズ 1『東京の情景』朝日文庫、2007 年。表紙カバー裏から―変貌を続ける首都・東京のビル群の隙間にわずかに残る江戸の面影。作品の舞台や懐かしい街角を池波正太郎が訪ね歩き、エッセイとカラーイラストで描く画文集。池波ファンが「幻の本」として愛する 1985 年刊の単行本を、イラスト全 30 点も収録し、初めて文庫化。

表紙の写真にある「最後の都電（雑司ヶ谷附近）」

都電は、いま、早稲田から三ノ輪までの〔荒川線〕一つになってしまった。東京という都会にとって、都電が消えたことは大きな、深い意味をもっている。都電は、都民にとって、メカニズム化する都会の狂暴な車輌の群れに対する一つの防波堤だった。いまの東京の、むかしのままの路線に都電が走っていたら、どんなにすばらしい都会になっていたろう。自動車の洪水がせきとめられ、他の方法によって管理されるようになっていれば、道は人のためにあったろうし、江戸以来の歴史を語る町名も残されていたろう。雑司ヶ谷附近を走る都電の路線には、まだビルディングの波が押し寄せて来ない。人びとは、ゆったりと道を歩んでいる。このあたりを走る自動車も、人間のために走っているようにおもえる。



「柳橋夜景」

いつもいうことだが、夜は、景観の中の邪魔なものを闇に隠してくれる。いまは、ほとんど昔日のおもかげをとどめていない柳橋界隈でも、夜の、この絵の一角を見ていると、どうにか、（むかしを偲ぶことができる‥‥）ような気もする。柳の木が門口にある船宿。赤い提灯の屋形船。なんでも、一人一万円で、この船に乗ると、大川をひとめぐりしながら、酒が出て、揚げたての天ぷらが出るそうな。もっとも、人数がまとまらなければ、船を出してはくれないだろう。江戸以来の伝統を誇った花街も、いまはビルの谷間の中に埋没してしまったかのようおもわれるが、そこはそれ、いまでも柳橋らしい芸者がいないわけではない。大川の姿は変らないが、その両岸はコンクリートの壁、高速道路にびっしりと包囲されてしまった。景観の変化は、人の心や生活までも変えてしまう。おもえば、おそろしい。

（2017 年 11 月 7 日）